

熊本県における銘柄米育成品種「ミナミニシキ」の栽培について

(第2報) 収量性と施肥法について

坂井定義・伊藤延久・岡村康博

(熊本県立農業試験場)

本県の自主流通米生産地域である山麓、球磨、準平地地域における良質品種ミナミニシキの栽培については移植限界、耐病性など安定栽培のための条件は無論のことであるが、この品種は晩生種でLag期間が長くなり、この期間の乾物生産が低下し、収量形質に大きく影響すると考えられた。したがって、この期間の茎葉中のN濃度を高める施肥法について、現地実証を含めて検討した。

1. 試験方法の概要

本試験は昭和50年から3ヵ年間当場で実施し、対照品種として、トヨタマ、日本晴を供試し、中苗移植で実施した。また、現地では菊池市、御船町でミナミニシキのみで実施した。

具体的な施肥法：

具体的な施肥法： (N・kg/a)

区名	N施肥 基肥量	追肥量				
		-40 日	-30 日	-25 日	-18 日	-10 日
標準区	0.6				0.4	0.2
Lag期追肥区	0.3		0.2		0.2	0.3
中間つなぎ肥区	0.6	0.2			0.3	0.2
変動区	0.6			0.2		0.4

2. 結果の概要及び考察

Lag期間と乾物生産：ミナミニシキは日本晴、トヨタマ、に比べ主稈葉数が多く晩生品種でLag期間（最高分けつ期～幼穂形成期までの期間）が長く、この期間の長短が稲体のN濃度及び乾物生産に大きく影響しており、ミナミニシキはN濃度の低下が大きく、乾物生産率が著しく低下してくる。これが、一穂もみ数の減少となり減収する原因となっているものと考えられる。

Lag期追肥と収量形質：Lag期に追肥した場合、茎

第1表 Lag期と茎葉N (%)

項目 品種	主稈葉数 (葉)	Lag 期間	茎葉 N (%)	
			最分期	幼形期
ミナミニシキ	18.1	17日	2.24	1.08
トヨタマ	17.1	12日	2.23	1.32
日本晴	15.4	5日	2.19	1.38

第2表 施肥法と収量形質 (S52年)

区名	形質 m ² 当り 穂数	一穂 もみ数	登熟 歩合 %	a当り 収量 kg	玄米 品質
標準区	352	82.7	93.8	61.3	4
Lag期追肥区	350	90.3	91.3	63.1	4
中間つなぎ肥区	369	84.9	95.4	63.9	4
変動区	336	89.2	93.5	61.8	3

葉中のN濃度が高く、乾物重が増加し、RGRが高くなって、一穂もみ数が確保される。

登熟歩合については、もみ数、年次間によって異なるが、Lag期追肥、変動区は幼穂形成期のN濃度が高くなり、若干低下する傾向を示すが品質的には悪化しないようである。

収量性についてはLag期追肥及び中間つなぎ肥区はLag期間の乾物生産が高くなり、一穂もみ数も多く、単位面積当りもみ数が増加して増収に結びつき、とくに、現地では明らかな差が認められた。

3. 要約

Lag期間の長い品種は草状が悪化しない範囲（時期・量）のN施肥によって、Lag期間に一定のNを維持し、一穂もみ数の確保と登熟向上のための乾物増加をはかる施肥法が必要と考えられる。